

## 現場での衛生的な子豚への処置

みやざき農業共済組合  
吉原 啓介

### はじめに

現在養豚場では子豚はワクチン接種・断尾・去勢・切歯・耳刻打ちなど様々な処置が行われています。またこれらの処置は外科的なものであり、衛生的な手法が必要となってきます。今回は不衛生的な鉄剤注射の際に起きた子豚の事故を紹介しつつ衛生的な処置を考えてみたいと思います。

### 発生状況と原因

6月の梅雨時期に、生後1日齢の子豚に鉄剤を1mL臀部に注射したところ2日目に注射部位が腫れて(図1)1腹中1頭~3頭が死亡しました。この様な状況が続けて6腹発生しました。(表1)

表1 発生状況

母豚No.	分娩日	鉄剤注射日	発症日	注射頭数	発症頭数
A	6月10日	6月11日	6月13日	15	3
B	6月10日	6月11日	6月13日	10	1
C	6月10日	6月11日	6月13日	10	1
D	6月13日	6月14日	6月16日	12	2
E	6月13日	6月14日	6月16日	12	1
F	6月14日	6月15日	6月17日	12	1



図1 鉄剤注射部位の腫脹

検査の結果、注射部位と主要臓器から大腸菌が分離され(病原性毒素は検出されず)特に注射部位の腫脹が顕著に認められたため、大腸菌性敗血症と診断されました。(図2)

鉄剤の注射方法を聞き取りしたところ、2mLの針付きディスポを使用しており、その日に注射する子豚は全て同じ針で注射をしていました。

以上の状況から針の使いまわしによる細菌感染が発生原因と考えられました。(表2)

また梅雨時期の6月ということもありゴムマットや豚房内などの細菌数も多く子豚の体表にかなりの量の雑菌が付着しておりこれらが注射の際に、針に大量に付着しこのような発症が起きたのではないかと考えられます。

また腹毎に1頭~3頭とまばらに散発したのは初乳の獲得状況が関与しているものと考えられます。対策として注射器具を2mLの針付きディスポから連続注射器(シュンター)に変更し、針は一腹一针・1頭とし注射毎に針をアルコール綿で消毒する対策を行ったところ発生は終息しました。

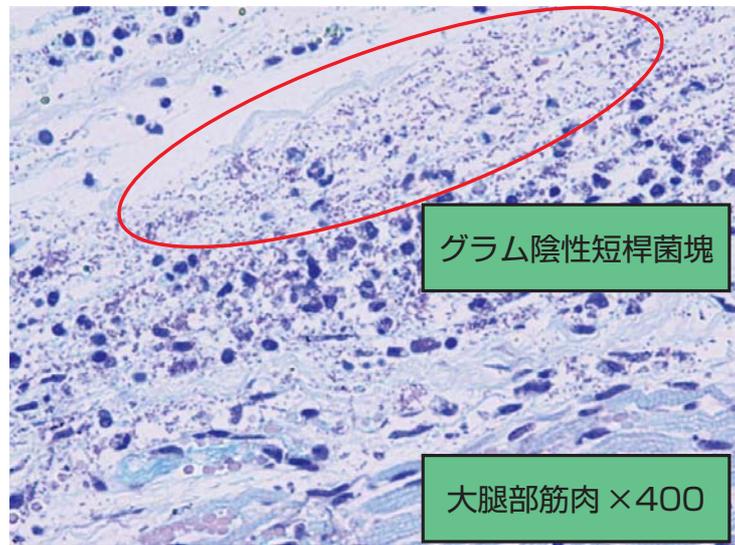


図2 図1の組織所見

表2 従来の注射方法の問題点

① 針の交換なし(全頭同じ針で注射)
② 針の注射毎の消毒なし
③ 子豚に注射した針でボトルから吸引

## まとめ

今回の事例より、やはり針の使いまわしは危険な行為だと痛感しました。PRRSなどは数十個のウイルスが体内に侵入すれば感染が成立すると言われています。ワクチン接種の際、針を使いまわした場合、針に付着した血液を介して感染が広がる可能性は十分に考えられます。また豚に接種した針でワクチンバイアルから吸引しないことも重要です。ワクチン接種の際は母豚一頭一針、哺乳子豚は一腹一針を心がけるべきです。注射行為だけでなく、去勢の際は切開部の消毒、作業中のこまめな器具の消毒が必要になります。断尾の際は切断部位の確認(長すぎず短すぎず)と切断部の消毒、切歯の際は切歯部位の確認とニッパーの消毒と定期的な交換など、非常に基本的なことですが本当にこれらの作業が衛生的に行われているか、常に現場での作業の確認が必要ではないかと考えます。またこれらの作業は清潔な場所で行わなければならない、豚舎や豚舎内の機材の消毒も必要でしょう。

出生後間もない子豚は非常に未熟です。現在の養豚管理の中ではこの時期に様々な処置を施さなくてはなりません。従って哺乳豚にはなるべくストレスを感じさせず、より迅速で術者にも子豚にも安全で、且つ衛生的な作業を各農場で確立することは子豚の発育や疾病コントロールにも影響してくるので農場の利益につながるものと考えます。

最後に現在の養豚情勢は肉豚事故率の上昇・飼料高騰・肉豚価格の低迷などかなり厳しい状況にあります。現場の問題点をもう一度しっかり見直し子豚の死亡事故を防ぎ、すくすく育つ健康で安全な豚を出荷したいものです。